

GSP(IARU Summer Class)に参加して

今回私はコペンハーゲン大学に行って IARU Summer class に参加しました。テーマは Security。私の専攻は薬学です。薬学部と Security はほとんどつながりがありません。このコースを申し込んだ理由は二つ。デンマークという国に魅力を感じた事。デンマークは世界一幸福度が高い国とされています。日本は物資に恵まれ平和で幸せであるはずなのに、幸福度は世界90位。日本とデンマークは何が違うのか。まずはそれが知りたいと思いました。もう一つの理由は Security というテーマに魅力を感じた事です。国際問題、経済問題、環境問題、国はたくさん問題を抱えています。薬学という専攻がら、なかなかこうした問題に接する機会がありません。3か月という長い夏休みを活かして、薬学以外の事を勉強したいと思いました。

デンマークの幸福度の高さはまずは人の良さにあると思います。デンマークの人の良さは最初の飛行機ですぐに実感しました。私は機内の窓からコペンハーゲンを見降ろし感動していました。すると隣の座席のおばさんが「コペンハーゲンへ、ようこそ」と気さくに話しかけてきて下さいました。おばさんは英語がままならない私を優しく導いて下さいました。空港での手続き、切符の買い方、電車の乗り方、ホテルへの行き方まで教えて下さいました。最後に名刺と電話番号を下さり、困った事があったらいつでも連絡しなさいと言って下さいました。そもそも海外に1人で行くのは初めてで飛行機に乗った時は、期待より不安の方が大きかったです。だれも頼る当てが無い事を心細く感じていました。おばさんの存在がどれ程私にとって大きなものであったか。コペンハーゲンでの生活に期待が膨らみました。

デンマークの人の良さは、その後の生活でも何度も感じる事となりました。地図を持って建物を探していると、「助けてあげましょうか」と通りがかりの人が声をかけてくれる。見ず知らずの人でも目が合うとにっこり笑ってあいさつしてくれる。エレベーターでは譲り合い。みんな他人を思いやり、笑顔をふりまわすゆとりがあります。東京は大きく違います。エレベーターでは我先にと乗り込み、困っている人がいても知らないふり。みんな時間に追われ笑顔を作る余裕もない。幸福度に大きく差がある事に納得がきました。では何が国民を笑顔にさせているのでしょうか。

デンマークと東京都の大きな違いはまず税金の高さ。消費税が25%。物価の高さにはびっくりしました。働くと半分くらい国に給料を取られてしまうそうです。これだけ聞くと、幸せとを感じる理由が分かりません。しかしこの国民から集めた大量の税金で国は豊かな社会福祉制度を実現しているのです。病院代は無料。授業料は大学まですべて免除。国民の利益を平等に分配する事で、過度なお金持ちもいない代わりに過度な貧民も存在しない。この制度がいいかどうかは分かりません。どうせ国に取られてしまうならと、努力や進歩を怠り発展が遅れてしまう気がします。しかし人の優しさ、ゆとり、幸福度を見るとデンマークの制度は確かな価値があると思いました。

さてセキュリティーのコースが始まりました。セキュリティーは私の専攻である薬学とかけ離れてるため、前提となる知識が0の状態からのスタートでした。コースが始まってすぐ自分の甘さに気がつきました。他の生徒の姿勢は私とは全く違いました。みんなは政治・経済などを専攻していて、前提となる知識が豊富にありました。私は自分の専攻ともっと関係があるコースを選べば良かったと後悔しました。まず英語が壁であり、さらに毎回学ぶ内容は初耳のものばかり。専門用語の嵐。授業中はひたすら耳を澄ませますが、ちよくちよく馴染みの単語が耳に入ってくるくらいで、全然話の流れが掴めませんでした。私はここに一体何しに来たのだらうと、寮に帰って繰り返し考えました。

私が立ち止って自問自答を繰り返している間、コースは止まることなく続きました。コペンハーゲンのコースの中には授業講義だけではなく、観光や交流などのお楽しみイベントも含まれていました。最初の私はイベントすらつらく感じました。他の生徒とコミュニケーションがとれない。英語が速すぎるだけでなく、それぞれの国に独自のアクセントがあります。このコースにはアメリカ人だけではなく、シンガポール、オーストラリア、イギリス、チェコなど様々な国からの生徒が来ていました。みんな同じ英語をしゃべっているはずなのに、全く違った言語を話しているように聞こえます。でも不思議な事にネイティブスピーカー同士はお互いの英語を理解できているようです。つまり標準語しか話さない人でも関西弁が通じるといった感覚でしょうか。

私は耳を英語に慣らす事から始めました。どんなに疎外感、むなしさを感じても、出来るだけ彼らと行動を共にしようと決めました。みんなはきっと、無言でそばにいる私を奇妙に感じた事でしょう。私は話者が変わるたびにそちらに姿勢を向け、全神経を集中させて聞きました。なんだか変わったと感じたのは3日目です。たしかに話の流れは分からないままですが、文章を作っている単語一つ一つを聞き取れるようになりました。

それからさらに3日後、単語が文章の中で意味をなすようになってきました。何をしたかという、次に来る会話を予測する事にしました。単語と流れと状況から、話を読み取る。かなり有効な方法です。例えば曇った天気の下で“umbrella”だけ聞き取り、話者が困った顔をしていれば「雨が降りそうだけど傘持ってきてないわ」という会話を予測できます。この方法で私は彼らの意見を7割がた理解し、適切な応答を出来るようになりました。これがコミュニケーションにおいて良い方法かどうかはわかりません。人の話をきちんと理解せずに適当に反応しているという事ですから。3割は予測を間違え、たくさん恥ずかしい思いをしました。しかしこの方法によって私はコミュニケーションがとれるようになり、無言の和製人形から抜け出せました。

コミュニケーションに必要なのはリスニングだけではありません。受け身の会話だけではコミュニケーションは成り立たないのです。私も話者となり、知っている事をシェアしなければなりません。ここで私はもう一つの壁にぶつかりました。みんなの話の内容といえば、自分の国紹介が鉄板テーマです。みんな自分の国の社会問題、エネルギー供給、年金制度、奨学金制度など紹介していました。私と言

えば、日本のおいしいものだとか桜がきれいとか、日本に関してほんの5分もかからないくらいの知識しか持っていません。すぐに話のネタは尽きてしまいました。「日本は怎なの？」と聞いてくれるのですが。あんまり良く知らないと正直に答えるしかありませんでした。なんでこんなにみんなよく知っているのか。例えば日本人の生徒に聞いて、日本の赤ちゃんの出産率を正確に答えられる人が何人いるでしょうか？原子力が日本のエネルギーの何割を支えているか答えられる人がいるでしょうか。他の国の人たちはみんな自分の国の制度や問題に興味を持ち、人に紹介する事に慣れていました。

私は国際問題よりも何よりもまず日本について知らなければならないと感じました。日本の年金制度、若者の社会問題、エネルギー供給率、地震の影響などを勉強しました。コペンハーゲンに来て日本の問題を初めて深く考えました。情けない限りです。日本人が日本を知らない事について一つの意見がネットに載っていました。日本人の若者は大人から意見を求められる事がない。そうした事を知らなくても問題無く生活できる。物資が豊か、平和すぎる閉鎖社会の問題の一つだと思いました。例えば隣の国と陸続きであれば、移民問題がつきまといコミュニケーション能力が求められます。それに対し日本は四方を海に囲まれています。周りと無理にコミュニケーションを取ろうとしなくても、生きていける安定社会なのです。

友達の英語が聞きとれなくて謝った時、たまにこうして慰めてくれる人がいました。「日本人は英語がしゃべれないのだから、あなたなんて英語うまい方よ。」私は本当に情けなく思いました。確かにほとんどの日本人大学生は英語が話せません。帰国子女や留学生は確かに話せると思います。しかし日本人で留学する人の数自体が減っているそうです。完全に世の中の流れと逆流しています。このままでは日本は他の国においていかれてしまうでしょう。まずは日本の英語の教育制度を見直すべきだと思います。日本の教育ではライティング、リーディングに力を入れています。中国やフィリピンでは会話リスニングに力を入れているそうです。文法の前にはまずは聞かせて耳から作るという国もあるそうです。そうした国では誰でもある程度英語が話せます。見習うべきだと思います。

さて授業についてです。世界にはたくさん問題があります。移民問題、気候変動、水問題、宗教問題、土地問題。問題には被害者がいて、被害をもたらす脅威があり、それを解決するアクターがいて、アクターの行動を評価する人がいます。様々な問題について4種類の登場人物を明確にし、枠組みにはめて考える事が、セキュリティという学問であるようです。ではセキュリティという学問がどのように使えるのでしょうか。問題を明確にすることで解決策を練る、解決すべき問題として注目を集める事が出来るなどの利用方法があるようです。毎日一つのテーマについてレクチャーを受けそれに関して議論しました。毎回新しいテーマなので問題を深めるというより、まんべんなくあらゆる問題に接するといった感じでした。人によってはこの形に不満を持っていたようです。最後の授業でも一つの問題に時間をかけて深く関わりたかったという声は何人かから上がりました。

日本人と他の国の生徒との違いもありますが、ざっくりと分けてアジア人と欧米人でも大きく違いが見

られました。授業中の姿勢です。レクチャーが終わり、先生が質問を求めると、欧米人から何個も質問が出るのです。質問に対し、他の生徒が反応し、それぞれの意見をぶつけ合っていました。先生が求めなくても生徒自ら議論を進めていくのです。まさに生徒が授業を作るとはこういう事だと思いました。こうした姿勢の違いについて、中国人シンガポール人日本人で話し合った時がありました。アジアの授業では先生が授業を作り、生徒は基本受け身側。中国シンガポールも日本と同じような環境らしいです。この環境は今の国際社会では不利だと思いました。例えば国際会議。欧米人は自分の意見を言う事に慣れているのに、日本人は自分の意見を言う事になれていない。どちらの環境で育った方が意見を通すスキルが長けているかは歴然だと思います。

サマーコースは2週間ほどの短いプログラムでした。サマーコースを通してたくさんの壁にぶつかり、自分の小ささ無知さを実感しました。世界は広いです。ぼんやりしている余裕は無いと感じました。まずは英語の勉強。その次にもっと日本に興味を持ち、世界に興味を持つ。そうしないと世界においていかれます。あせりました。日本の学生はこの事に気づかず生活しています。ぼんやり過ごしすぎている。もっともっと海外に出て行って、刺激を受けるべきです。

私はこれからも機会があればまた何度でも海外に行きたいと思います。今回の機会を与えられた事に心から感謝しています。

参加プログラム名 : Security, Practices and Dilemmas of Widening the Concept to
Cover New Threats such as Cultural and Climate Change

開催大学 : Faculty of Social Sciences, University of Copenhagen

参加期間 : 15-28 August 2011

(1) プログラム概要

8 月の後半にコペンハーゲン大学において Security (安全保障) について学ぶ 2 週間の IARU GSP に参加した。参加者は 20 人ほどで、女子学生が 7 割を占め多かった。修士課程、博士課程の学生も参加対象としていたので専門知識の豊富な人が多く、学部 3 年の私は最年少であった。

最初の 2 日間に Security についての理論を学んだ。冷戦が終わり、安全保障は米ソの核問題だけに向けられるものではなくなった。ある問題を安全保障化するとその問題に人々の意識が向けられるが、どんな問題も安全保障化して必要以上に騒ぐべきではないし、全ての問題を安全保障化したのでは安全保障の存在意義がなくなる。ならば安全保障の定義をどこに置くべきなのか。この問題が「安全保障の概念を広げることの葛藤」としてプログラムの題に付けられている。3 日目からは、不安定な国家、人権、移民、海賊問題、気候変動、情報と監視など 1 日ごとに決められたテーマで安全保障の観点から見た講義を受け議論をした。最終日はまとめの議論を行った。

プログラムは平日毎日朝 9 時から始まった。9 時から 9 時 45 分に、前日のプログラム内容のまとめとその発展を、予め担当を割り当てられた 3 人の学生がプレゼンし、その発表内容から発展して教室で議論を行った。教室の机配置はコの字型で討論しやすかった。その後はだいたい 90 分から 2 時間の授業を 3 コマほど受けた。

授業はコペンハーゲン大学の教授による講義の時もあれば校外に話を伺いに行くこともあった。例えば国会議事堂に行ってデンマークの政治家に移民問題について話を伺ったり、海賊問題に関連して外務省に行って官僚にソマリア支援について伺ったり、デンマークの国営放送である DR に行ってメディアが世論に及ぼす影響について討論したりした。政治家や官僚に講義をしてもらえるのはなかなか貴重であると感じたし内容も興味深かった。他にも、デンマークの気候センターに行って IPCC の委員の方に温暖化について話を伺う、人権問題に関連して拷問被害研究所の研究員の方に話を伺うなど、盛り沢山のプログラムであった。こうしたどの授業においてもその後半 3 分の 1 程度 (時には半分) は学生の質問と議論に費やした。しばしばこの学生同士の議論は講師の方の授業よりもレベルが高かった。この discussion にも見られることだが、学生の積極的な姿勢は今回もとても印象に残ったことの一つであり、後で詳しく述べたい。

このような Academic のプログラム内容の他に、同じぐらい Social なプログラムも大事だと言ってくださり、コペンハーゲン大学のスタッフの方々が沢山の fun activity を用意してくださった。最初の日は大学内で welcome dinner、最終日の夜は farewell dinner を高級レストランで開いてくださった。物価が高いために自分では手を出せないような豪華な美味しいものを沢山頂き、参加者とともに過ごしとても楽しく良い思い出が得られた。またその他にも運河ツアーやチボリ公園にも連れて行ってくださり、常に参加者が打ち解けやすい雰囲気をつくってくださった。温かいおもてなしも添えた、よく練られたプログラムであったと思う。

(2) プログラム外での生活

今年度工学部は3月の震災の影響で授業期間が遅れたので、私は8月12日に試験を終了し、翌日13日の飛行機で成田を発ち、8月30日まで滞在した。コペンハーゲン大学に紹介された寮に泊まる者が多く、それらの寮費として最短でも1ヵ月分支払わなければならなかったもので、参加者の中には、8月初めからコペンハーゲンに来て旅行を楽しむ者もいた。私の寮は寝室が別でシャワーとキッチンを同じ階で共有するもので、私はオーストラリア大学、パークレー大学、ケンブリッジ大学、北京大学の4人と一緒であった。この寮に泊まれたことは本当に幸いで、毎朝一緒に歩いて登校し、夜も遅くまで common room で話ることができて、プログラムの時間外も仲を深め合うことができた。

授業は早いときは15時半、遅いときは18時頃に終わった。昼ご飯は大学の食堂で食べることが多かったが、夜は外でプログラム参加者何人かで食べることもあれば、寮で夕飯を一緒につくって食べたり、ピザや果物を買って来て遅くまで話し込んだりすることもあった。寮にはコペンハーゲン大学からの参加者や他寮に住む参加者もしばしば集まり、ひたすら話して楽しい時を過ごした。

土日はそれぞれの参加者が好きなように過ごすことができたが、私含め大勢の参加者が一緒に過ごすことを選んだ。最初の土曜日にはゲイパレードに参加した。これは同性愛者の権利を訴えてコペンハーゲンの町中を同性愛者やその支持者が仮装等をして歩くもので、かなり大規模であり日本ではまず見られない光景であった。一昔前までは権利を主張できなかったのに今は堂々と歩いて笑い合えるのはとても幸せだと私の友達も言い、市民も受け入れているように見えた。

その次の日にはスウェーデンのマルメと言う街に行った。コペンハーゲンから電車で40分ほどで着く。通貨は変わるものの雰囲気もさほど変わらず、あまりの近さと隣国へ行くことの手軽さに驚いた。税金が安いのでわざわざビールを買い込むことのためだけにデンマークに来るスウェーデン人もいるとのことである。ヨーロッパからのプログラム参加者と話していても感じるのだが、島国日本と比べ、他国の人はもっと隣国を身近に感じているように思う。それは地理的に当たり前だが、こうした意識は日本の他国との関係に少し影響を及ぼしているように思える。次の土日も参加者で世界遺産を観光に遠出したり、カ

フェやレストランに入ったり、寮に集まってランチをしたりして、プログラム外でも沢山の貴重な時を過ごすことができた。

また北欧のイメージ通り物価はかなり高かった。しかし町で見掛ける子供の数がかなり多く、また学生は政府から補助金を支給されるなど、社会保障の行き届くさまが見受けられた。コペンハーゲン大学の学生や教授たちは、デンマークを最も平和な国と称していた。但し、滞在途中に水道水のバクテリア量が許容基準を超えたため、数日間歯を磨くのに水道水を使わないように推奨されるような予想外の出来事もあった。

8月と言っても長袖に上着を羽織ることが多かったが、21時頃でもまだ明るく日が長かった。その為もあって夜晩くまで友達と外で話すことも多々あった。ただ逆に北欧の冬は本当に厳しいものであると思う。またデンマークは国土が小さくかつ平坦であることから、人々は通勤にも自転車を用いる。自転車専用道路の高度な整備具合は興味深く、また、電車にも自転車専用のスペースが設けられるほどであった。

(3) 印象深かったこと

まず一つ印象深かったこととして、先に触れていないが、プログラムの **Social Activity** の一つとして、**Christiania** と呼ばれるコペンハーゲン内のヒッピーの自治区を観に行ったことである。**Christiania** は自然の豊かな場所にあり、車は使わない、アルコールは飲まないなどの独自の規則をつくり暮らしている。具体的な数字は分からないが自治区の規模は大きく、コペンハーゲンで人魚像に次いで2番目に観光客を呼び込んでいると言われている。また自治区内には一つの通りがあり、その通りでのみマリファナを売買して吸って良いとしている。もちろんデンマークで麻薬行為は違法であるが、その一つの通りのみで売買されるなら、禁止しても結局広がるのでそれよりはましと言うことで事実上黙認しているようだ。この問題を含めデンマーク政府は様々な葛藤を持つそうだが、近代都市に独自の規則を持つ自治区が同時に存在し、ある程度市民に受け入れられている様は、現代のグローバル社会を少し象徴しているようでもあって、興味深かった。

私は工学部所属であるが、今回 **Security** について学ぶプログラムに参加した。参加動機は、世界各国から来た学生たちから世界レベルにある様々な問題についてそれぞれの意見を聞き、彼らと話し合えるのは面白いだろうと感じたこと、将来海外で働くことも考えているのでそうした知識を増すことは有益かもしれないと期待したこと、また、世界のトップレベルの大学の学生たちと知り合いたいと思ったことである。あと正直に言えば、8月のプログラムであるので学科の講義を休まなくて済むこともこのプログラムを選んだ理由であった。しかし他の参加者はほとんどが **Law, Social Studies, Security, International Relations** などを専攻しており、バックグラウンドは **Security** に近いものであった。加えて博士課程や修士課程に在籍する人が多く、予備知識が私は劣っていた。ある意味私はこのプログラムを短い「留学」のように捉え日本ではなく海外で学ぶと言うことに大きく重きを置いていたが、他の国々からの参加者、特にヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアか

らの参加者は、このプログラムを留学と言うよりは「たまたま自分のやりたいプログラムが外国であった」と言う意識で捉えている人が多く、違いを感じた。彼らの話を聞いてみると、自分が生まれ育った国ではない大学に通うことはそんなに例外的ではなく、色々な国のサマースクールに参加し、院に進む場合は自国だけでなく世界中から行きたい大学を見つけると言う。英語のネイティブ話者であると、母国語で学べる大学が世界の色々な所に存在することがその理由かもしれない。彼らにとって **International**、**Global** であることは生活レベルで当たり前のようにであった。

授業の多くは **discussion** に費やされたが、予備知識で劣り、かつネイティブでないとなると発言するのが難しかった。かなり早いスピードで高度な単語で話されると付いていくことが難しいときもあり、もっと英語を勉強しようと思える動機となった。また先に述べた通り、その **discussion** の質が高いのである。教授が講義の後で「質問は？」と聞いて質問が出ないことはない。そしてその質問に対して他の学生がコメントを述べるのがほとんどで、**discussion** がどんどん深まって行く。講義をしている教授を中断して生徒が質問をすることもよくあった。日本の大学では見られない光景であり、また発言の多くは北京大学、シンガポール大学、東京大学と言ったアジア勢よりも、オーストラリア大学、ケンブリッジ、バークレー、コペンハーゲン、イェールの各大学の生徒からであった。高度な知識を得られる日本の講義形式も好きであるが、教育方式がこうも違えば、意見を瞬時に的確に述べる国際社会に必要な自己表現能力の度合いには雲泥の差が出てしまうように感じた。私たちがもっと訓練しなければならないように感じる。

また、プログラムの内容上国際的レベルにある社会問題について多く話したが、教授等話者陣がヨーロッパ出身であることにも一因があるであろうが、西欧で問題視されていることについて多く話した。例えば移民の問題はその典型である。ヨーロッパ、アメリカ出身の参加者は移民についてかなりの知識と問題意識を持っていた。日本は先進国で属するアジアの他の国とは少し違い、似た境遇にある国と親密な連合を組める訳ではないし、また島国で海外と自国とをきっちり分けており、かなりユニークな存在なのではないかと考える。それ故移民問題を今あまり考えていなくてもまかり通れている面もあるが、いずれそうではなくなる時は来ると考えられ、今からちゃんとどう対応するのかを考えておかないと後で今のヨーロッパのように問題になると思われる。講義では軍隊についても話したときも参加者は意見をそれぞれしっかり述べていて、国際的なレベルにある問題を解決すべく自国がどう進むかをもっと深く考えなければならぬと感じた。これらの問題に限らず、国際問題への問題意識をもっと備えるべきであると強く感じた。

このように痛感した理由の一つとして、日本の存在感が減っているのかなと感じたことにある。講義で色々な人が話してくださったが、アジアの国々に言及する際、常に **China** が最初に呼ばれ、「**Asian Countries such as China, India, Korea, Japan**・・・」の順でどの人も言っていた。時には **Japan** は呼ばれないこともあり、国際社会に置いて行かれているように感じた。先ほど述べたようなビールを買いに行くためだけに隣国に行くようなヨー

ロップの国々とは、他国への意識が根本的に異なるように感じる。他国を海外と呼ぶことにもそれは表れている。島国であるが故に他国ほど日本は海外の国々に影響されないし、海外に行くと日本がいかに平和で高度な技術を持った国であるかを実感する。私はそれが悪いと言っている訳ではないし日本が大好きだ。しかし今回のプログラムで、それを心地良く感じ、日々をぼやぼやと過ごしているだけでは駄目なのだと痛感した。これは私のみの意見ではなく、もう一人の東京大学からの本プログラムへの参加者も同じようなことを述べていた。国際社会をより理解しようとする意識が日本全体により必要であるように感じた。

(4) まとめ

本プログラムで得られた大きなものはまず、参加者と出会い仲良くなれたこと、また、移民、人権と言った国際社会レベルで解決すべき問題についての知識を得られそれらについて他国の人がどう考えるのかを知れたことにある。プログラム参加者と過ごせた時間はとても楽しく温かい時間であった。今後彼らの国を訪れたら会いに行こうと思う。

そしてもう一つ得られた大きなことは、参加者の問題意識に触れてもっと国際問題を積極的に理解し解決しようと努めなければならないと理解し決心したこと、また **discussion** を経てより積極的な態度で学習に望まなければならないと感じた意識の変化である。

今後もこのような機会に積極的に参加し視野を広げ、国際社会に対する理解を深め、より多くの人に出会いたいと考える。2週間とは思えないほどの充実したプログラムであった。東京大学国際交流課の皆さま、コペンハーゲン大学 **CAST** のスタッフの方々、ウェーバー先生、リゼ先生、プログラム参加者のみんな、家族に感謝する。